

## 野球部だより

西祐輔 谷口龍成 井上弘太 和田航太郎  
赤嶺佑弥 東野克実 東山力也 金城千汰  
高石夏輝

はじめに

今日、南米のペルー共和国では子供たちが十分な教育を受けることができず、非行に走る子供たちが増加している。そのような子供たちを野球などのスポーツを通して教育していく活動が進められている中、縁あって我々11名は独立行政法人国際協力機構 (JICA・International Cooperation Agency 以下、JICA) の事業のひとつである海外短期ボランティアに野球隊員として参加する機会を得た。本報告では我々が2月5日～3月5日に参加したJICA短期ボランティアでの活動を通じて得た経験と派遣国ペルーの実情について述べていくこととする。

西 祐輔

復興への寄与、異文化社会における相互理解の深化と共生、ボランティア経験の社会還元などの3つの目的である。応募できるのは20～69歳の方で、日本国籍を持つ方である。募集は年に2回で春と秋に行っており活動分野は農林水産、保健衛生、教育文化、スポーツ、計画・行政などの職種があり自分の持っている知識、技術、経験などを生かせるのがJICA海外協力隊の特徴である。

### 3. ①選考

井上弘太

JICAと近畿大学が連携を結んで8年目が経過した。まず、条件として20歳以上である事、TOEICで330点以上、英検3級以上の資格を持っている事が必須である。次に提出書類で応募した理由、派遣されて何をしたいか等の書類審査がある。書類審査に合格後、北九州にあるJICA九州で面接を行い、派遣にふさわしい人物であるかの選考がある。主に書類審査で記述した事や、現地での活動についての質問がなされた。面接試験に合格すれば派遣に向けて様々な書類の提出、派遣前訓練という流れになっている。

### 3. ②派遣前訓練

和田航太郎

私たちはペルー体育庁野球連盟に短期間派遣される前に福島県二本松にあるJICA派遣前訓練で1週間の研修を行った。研修では毎日講義を受講し、多くの方々と交流ができた。講義では主にJICAボランティア事業の概要や海外での安全対策などを学んだ。任国での現状を把握し、慣れない環境の中でどれだけ早く対応するかということを学べた。例えば私たちが派遣されたペルーでは銃社会である。よって、そのような状況になった時の対応の仕方や行動方法などについて学んだ。派遣前訓練では異なる職種の方々との交流なども多く行った。職種は違えども一人ひとりが持っている技術、知識、経験を駆使し活動する目的は同様なので色々な意味でとても勉強になった。

### 4. ①任国事情

赤嶺佑弥

私たちの活動を行ったペルー共和国は、南アメリカ西部に位置する首都をリマにおく共和制国家である。紀元前から多くの古代文明が栄えており、世界最大のインカ帝国を有していた。

ペルーの抱える問題として、一つ目は農村部から都市部へと人口移動による人口集中が問題となっている。農業失業者が職を求めて首都リマへ移動する。

二つ目は軽犯罪の犯罪率が増加していることである。農村部から都市部へと人口が多

## 2. ①JICAの歴史

青年海外協力隊 (JOCV・Japan Overseas Cooperation Volunteers) 派遣事業は、前述の協力隊発足の経緯のとおり、1965年 (昭和40年) 4月に日本国政府の事業として発足した。事業の実施は当時の海外技術協力事業団に委託され、同事業団の中に日本青年海外協力隊事務局が設置された。

西 祐輔

その後、1974年 (昭和49年) 8月に日本国政府が行う国際協力の実施機関として※国際協力事業団 (JICA・Japan International Cooperation Agency (現 国際協力機構)) が発足し、その重要な事業のひとつとして受け継がれ、名称は青年海外協力隊となり、今日に至っている。

## 2. ②JICAとペルー野球ボランティア

谷口龍成

JICAボランティアとは、青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、日系社会青年ボランティア、日系社会シニアボランティアの4種類のボランティア事業の総称であり日本政府の政府開発援助の一環として1965年に青年海外が発足して以降、独立行政法人国際協力機構が実施する事業である。開発途上国からの要請に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、開発途上国の人々のために生かしたいと望む方を募集し、選考、訓練を経て派遣する。JICAの目的は、開発途上国の経済・社会の発展、

く移動し、移民を受け入れたことで近年増えてきていると考えられる。

#### 4. ②近畿大学生、ペルー到着

東野克実

私たちはペルーに到着するまでに2つの空港の乗り継ぎがあった。2月5日13時40分に福岡空港を出発した。15時25分に成田空港に到着し、アメリカにあるアトランタ空港に向かうが17時50分に成田空港を出発した。アトランタ空港に到着したのは現地時間の2月5日16時14分だった。私たちはアトランタで1泊して2月6日16時50分にペルーに向け出発した。ペルーのリマ空港に到着したのは2月7日1時4分だった。全員体調万全で到着することができた。

リマに到着した時1番に感じたことは、日本とは異なり、とても暖かいということだ。日本とは真逆で私たちがペルーで活動を行うこの時期は夏となる。リマ空港に到着し、生活をするホテル・ポコアポコに向かった。そしてこの時から、任用地での活動に楽しみな気持ち反面、不安を抱えながら1ヶ月間任地に貢献する為、活動開始となった。

#### 4. ③現地の人々との触れ合い

東野克実

私たちはペルーに派遣され多くの現地の方と触れ合う機会があった。主な交流は野球教室、表敬訪問、日系施設訪問、日本人学校訪問である。

野球教室では、現地の子供たちに野球の指導を行い、魅力を伝え交流を深めた。子供たちの楽しそうに野球をしている姿は強く印象に残っている。

表敬訪問では、AELU、ペルー日系人協会、チヨリージョス市役所を訪問した。AELUではAELU設立までの成り立ちを学び、ペルー日系人協会では施設案内をしていた。日本料理や日本語の本など多くあり、とても日本との距離を近く感じる事ができた。

チヨリージョス市役所では、市長と対面して野球道具の寄付をした。日系施設訪問では沖縄県人会館、エンマヌエル協会老人ホー



ムを訪問した。2つの施設とも高齢者の方と野球の試合を行い有意義な時間を過ごすことができた。

日本人学校では、授業参観やスポーツ交流会を行った。日本人学校は、小学1年生から中学3年生までの日本人生徒が勉強を行う施設である。又、多くの部活動があり、日本の学校と変わりはない。授業参観では、子供たちの授業に参加してとても懐かしい気持ちになった。

今回の活動で、現地の方はとても温かく言語の壁を感じない程に会話をする事ができ、日本とペルーは親日国だという事を実感することができた。

#### 5. ①近畿大学生の活動の様子

東山力也

今回私たちは、近畿大学の大阪本部と福岡あわせて11人のメンバーでボランティアに参加しました。今年の活動は、現地の子どもたちへの野球指導、現地チームとの交流試合、日本人学校訪問に加え、例年には無かった沖縄県人会や、エンマヌエル協会老人ホームにも参加させていただきました。

子どもたちへの野球指導は、楽しんでやらせようとして説明したり、覚えてのスペイン語を話したりして笑顔になりました。短期派遣中、私たちは、野球を通して多くの方々に笑顔にすることができ、改めて野球というスポーツ、またスポーツを通してのボランティアの素晴らしさを実感しました。

また、今年には多くの日系人の方と交流することが出来ました。沖縄県人会やエンマヌエル協会老人ホームの方々は、日本の現状や私たちにとても興味があり、非常に楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

このようにペルーでの貴重な経験を、現地の方々だけでなく私たちが同時に成長することが出来ました。今回のボランティアを通して、私たち自身の人生に少しでも多くのことを活かしていきたいと思えます。そして今度は、私たちがJICAボランティアを知らない人や新しいことにチャレンジしたいと思っている人々に異国の地で経験したことを伝えていく



役目を果たして行きたいと思います。

今回、私達の派遣に際しまして、ご指導、ご支援頂いた全ての方々に御礼申し上げます。

### 5. ②試合の様子(球場別)

・ A E L U (アエル)

東山力也

A E L Uとは日系人が創設した総合運動施設である。施設内には野球場だけでなく、サッカー場やフットサル場、テニスコートや屋内外のプール、陸上競技場などスポーツをする上で日本と大差ない施設を整えている。また施設内には、レストランや売店なども兼ね備えており、レストランではそばやカツ丼など日本食も用意されている。他にも日本語の看板や日本語を話すことができる店員がいるということもあり、日本人である私達も日々充実した生活を行うことが出来ました。

今回の派遣では、A E L U施設内にある4チームの指導を中心に行いました。年齢層は中学生くらいの子ども達に指導を行いました。今年の活動は、現地のコーチのサポートではなく自分達で練習メニューを考え、実際に指導しました。

練習は3日間あり、1日目はキャッチボールやバント練習などの基本練習。2日目には、バッティングや試合形式のノックなど実戦形式の練習を行い、最終日である3日目には試合を行いました。ペルーの子どもたちは、年々上達していると聞きました。しかし、基本練習をあまり行わない傾向があります。その中で、私たちが手本となり練習を見せることにより基本の大切さを伝えることが出来ました。

今年の指導を行うことにより、A E L Uのコーチや子ども達も上達するのを実感できたと思います。私たちは最後に実行して継続することが将来に繋がると伝えました。

最後に、A E L Uの施設関係者の方々は、我々近大生を温かく迎えてくださりとても活動しやすい環境を作ってくださいました。改めてペルーの方々には心からの感謝の意を表したいです。



・ C A L L A O (カヤオ)

和田航太郎

C A L L A Oは今回私たちが主に活動したA E L U同様野球だけでなく、サッカーグラウンドやバスケットボールコート、体育館などスポーツを多く行うことができる総合運動場である。しかしカヤオの球場はA E L Uの球場とは異なり、外野の芝生などの整備が不十分で打球が転がらないことや、苦勞する場面が多くあった。カヤオという地域は都心部のリマと比べると少し過疎地域である。

私たちはそのカヤオでもたくさんの子供たちの指導を行った。野球を全く知らない小学生から少し経験のある高校生まで指導をした。小学生以下の子供たちには、とりあえず野球を楽しんでもらうために私たちも笑顔で楽しく指導することを意識し、中学生以上の学年は、基本動作など体の動かし方などを指導した。スペイン語は伝わらない中でジェスチャーや少し覚えた野球用語などを話し充実した指導を行えた。印象に残ったのはカヤオの子供たちはポロポロのグローブを使っていたことだ。しかし子供たちが野球をとっても楽しんでいる姿をみて日本との違いを感じた。

・ C H O R R I L L O S (チヨリージョス)

井上弘太

チヨリージョスでは、歴史について深く触れました。チリとの戦争の時にチヨリージョスで亡くなった人の銅像を観光したりとても歴史深い街でした。チヨリージョスのミヤシロ市長さんと対談をし、会食をしたりして。私達を心から歓迎してくれました。

野球指導ではチヨリージョスには野球場がなく、サッカー場で野球の指導を行い子供達が目を輝かせて野球に取り組んでくれました。野球道具の寄付や、子供達が喜んでくれる活動をしました。チヨリージョスは、サーフィンが有名でサーフィンの指導など日本ではできない体験をさせていただきました。チヨリージョスの方々は本当に優しく自分達の事をとても歓迎してくれて野球の指導だけでなく交流もたくさんすることができたので非常に素晴らしい経験ができました。

・ T R U J I L L O (トゥルヒージョ)

金城千汰

トゥルヒージョは、リマから飛行機で移動しました。到着して、体育庁の方にお会いすることができ、歓迎していただきました。このような方々に挨拶できる経験はあまりないので良かったと思



います。

翌日からは、野球教室と試合を行いました。トウルヒージョには野球場がなく、陸上競技場で野球教室と試合を行いました。陸上競技場で野球をやるというのが初めての経験だったので、どうやってやるのか、どうなるのかと心配になりましたが、やってみると意外に出来たので面白かったです。野球教室は小学生以下や、野球をした事のない子供達などに教えました。トウルヒージョは日差しが強く、多少きつかったです。しかし、子供たちが楽しそうにやっている姿や、一生懸命やっている姿を見ると疲れを忘れて取り組むことができました。試合では、成人のチームと選抜チームと試合をしました。試合では、私がファーストを守っている時ランナーと話したりして、楽しく試合に臨めました。選抜チームとの交流試合では、試合の勝ち負けに拘らず野球というスポーツを楽しむ気持ちを感じさせてくれたトウルヒージョの方に感謝したいと思います。

野球教室では子供たちはバッティングが大好きで守備の練習中にバッティングをやらせてくれと迫ってきましたが、きちんと説明をすると聞いてくれたので、素直さを感じました。ペルーの子供たちは素直で元気だったので非常に楽しく過ごすことができました。

### 5. ③試合の様子

今回私たち11名青年海外協力としての活動の中で、野球の普及、指導とは別にペルーでの国際試合を行った。国際試合はペルーのナショナルチーム、ペルー代表23歳以下、ペルー代表18歳以下、トウルヒージョ地区代表のチームと試合を行った。結果は3勝2敗2分と思うような結果を残す事が出来なかったが、日本の小技を絡めた野球をペルーの人々に見せる事が出来た。ペルーの受け入れは非常に良く、試合が終わった後にサインなどユニホーム交換などを求められるなど日本人に対しての好感度はかなり良いと感じた、ペルーは親日であり、日本との関わりは非常に強い国だと感じた。ペルーの選手は



高石夏輝

とても必死にプレーして常に全力で私たちにぶつかって来てくれて野球に対しての愛情は非常に強い人々が多くとても嬉しかった。また、ミスしても笑顔で受け入れていて、とても明るい雰囲気です。プレーしていて、こういった文化はとても良いと思ったと同時に日本にもこういったスタイルがもっと増えて欲しいと感じた。しかし、明るい雰囲気が時折緩いプレーやケアレスミスなどを生み出していたのでそういう部分がペルーの野球の課題だと感じた。

### 6. 終わり

高石夏輝

昨年、ペルー派遣に続き今回の派遣に協力、支援して頂いたJICA関係者の方々、近畿大学の関係者に感謝を述べたい。学部長をはじめとする大学関係者の方々には、昨年と同様に私たちの派遣のためにたくさん動いて頂いた。また、青年海外協力隊OBであり、経営ビジネス学科スポーツマネジメント研究室の黒田次郎先生には、多くの助言やスペイン語の指導をして頂いた事や活動の機会を頂いた。そして、私たちが所属している硬式野球部の関係者である中尾勝史監督、井戸博紀コーチには、不安のある中で私たちの活動に協力して頂いた。多くの人々のお陰でこの活動がとても有意義なものとなった事を感謝したい。また、今回のボランティア活動では多くの事を学ぶ事ができ、素晴らしい経験となった。これほど文化の違いに触れる事が出来る機会はこの先の人生で滅多に無いと思うので、この経験は自分の人生の財産である。日本という恵まれた国で多くの人々に支えられて今の自分があるという事を改めて感じた。近畿大学の代表として、ボランティア活動を行えた事を嬉しく思う。

